

につくることは困難なので、枝教研として一番蓄積のある製図教育からつくろうということになった。春の合宿研究会（4月31日）に常任委員の森下氏（和光学園）と委員の川瀬氏（同志社中）により、自主編成テキストをつくるための観点や考慮する問題点が提起され深められた。（この討論のふとめは合宿研の報告を参照して下さい。）

これらを受けて4月17日の東京サークルで具体化を話しあいその討論をふまえて5月26日の常任委員会で下記のように取り組みを決定した。

①製図テキスト作成のための討議が枝教研全体としてなされていない段階で常任委員会名で作成することは、団体の民主的な運営からいってこのましくないので、各地域のサー

クルの責任で作成し今年の青森大会へ提出する。②このため、そのたたき台として東京サークルでは必ず準備をする。編集委員会（チーフ森下氏、委員、河野、藤井、小崎、山本大谷）を構成し、原先生と村井先生の助言をえて進める。6月と7月に研究会（7月に合宿）を開く。③他の地域でも、個人・学校・サークルの形にこだわらずできるだけ作成のための努力をして青森大会へもちよる。

以上の討論の主旨をご理解いただき、自主テキスト第一号製図が今年の夏には日の目を見るよう関係各位の方々のご努力をおねがいしたいとおもいます。

（枝教研事務局委員、大谷良光）

自主編成テキストの作製をめぐる諸問題

— 春季研究会の討論から —

1 去る3月31日の春季研究会では、技術科の自主編成テキストの作製というテーマをめぐって討論が行なわれた。常任委員会がこのようなテーマを設定したのは、技術教育の民主的発展をめざす研究が深まってくるなかで、教育現場ではよいテキストが切実に求められているのだから、枝教研の研究成果をもち込んだ自主テキストともいべきものを作製して、研究成果を世に問い、いっそうの実践・研究の発展を期する必要があるのではないかと、という意見が会員のなかで強まっているので、これを枝教研の当面の課題の一つとして検討し、方向が定まるならば具体化する必要がある、と考えたからである。そして、もし自主テキストづくりに取り組むとすれば、技術科教育研究の全体の状況からみれば最も遅れている分野であり、それ故に枝教研としては最も力を入れてきた分野の一つでありまたすぐれた実践（家）を生みだしてきた製図学習の分野から手がけることが適切であろう

と考え、これらの事情を含んで、東京の森下一期氏、京都の川瀬勝也氏の2人に問題提起を依頼した。

2. 森下氏は、自主編成テキストの作成に関しては、まず自主編成運動の視点を確認しておく必要があるとし、それは①憲法、教育基本法の精神にそったものであること、②子どもの全面発達を保障するものであること、③科学に開かれ、系統的で精選されたものであること、④組織的・集団的なものであること、⑤職場斗争と一体的にすすめなければならないこと、⑥父母、地域との結びつきを深めること、などであろうとのべた。そして、枝教研として自主テキストをつくるかどうかについては意見を出して欲しいところだが、「これまでの実践をもとに、それをまとめ、具体的な展開もみることのできるテキストにすることは、これまでの研究をさらに進めるステップとなるし、その要求が強いことは確かである」とのべた。

この自主編成テキストづくりの視点については佐々木も発言し、1958年の小中学校学習指導要領の改訂によって教育内容にたいする国家統制が強められて以来、教育内容の自主的・民主的編成の必要性が強く自覚されるようになってきたこと、教科書にたいする統制が強まってきたこと、たとえば技術科の教科書の種類が10種(62年)、6種(66年)、3種(69年)、2種(72年、開隆同と実教)と激減され国定とさして変りがない状況が現出してきたため、ますます教育課程の自主編成という課題がクローズアップされてきたのだという歴史的背景にもふれ、しかし「自主編成」という仕事は、個々の教師が「我れ勝手」にやればよいということではなく、科学と教育研究の成果に依拠して、森下氏の指摘するような視点にたつて民主的にすすめることが重要であろう。とのべた。

また、自主テキストづくりの視点に関連して、討論のなかでは、技術科の男女共学をすすめるうえで技術と家庭が別の教科書となっていることが致命的な障害となっているので、男女が統一して使用できるテキストが絶対的に必要になっている、ということが大谷氏から強調された。

川瀬氏は、自主編成テキストづくりの視点として、検定教科書にとって代るべきものでなければ自主編成テキストとはいえないのではないか、その意味で自主編成の課題をたんなるプリント配布におわらせてはいけない、もちろんそのためには職場の民主化という困難な課題と取り組まなくてはならないのだが、と述べた。

3. 自主編成テキストづくりを実際化する場合の問題として、森下氏は、①教科全体のなかで特定の分野のテキストをどう位置づけるか、時間配分も問題になるが、一つの考えとして、その分野で教えねばならないことを盛り込むことにし、どのように使いかは別に考える、という方法もある、②教師の参考書にするの

か、生徒の参考書になるようなものか、ノートのようなものか、教科書のようなものか、授業書のようなものか、など、どのような形にまとめるのかという問題、③自主テキストのまとめかたとも関連して、取り扱い説明書のようなものの必要性の有無、などが問題になろうと指摘した。

森下氏はまた討論のなかで、男共共学をすすめるために自主テキストが必要だという意見に関連して、「たしかにそういう面があるが、どのような教育内容が要請されているのかという点が基本でなければならぬのではないか、たとえば製図でいえば、投影法の理論と実際の教育が全く欠けているのが困るといようなことからテキストづくりが必要になるのではないか、(そうでなく、たんに統一テキストが必要だというなら、既成のものをコピーしただけでも統一テキストはできることになる)」という見解をのべた。

原氏は、森下氏の問題提起に関連して、「たしかに、自主編成テキストという場合、テキストとは何なのかという議論をもっと深める必要があるのではないか、技教研ではこの点の討論がまだだけ不十分のように思う」とのべた。幡野氏はテキストづくりとその性格について、「自主テキストを直しのきかないようなものとするのはまずい。まずいところをいつでも修正していけるようにすることが重要である。いわば、常時修正できることが自主編成テキストのよさであり、自主編成テキストをつくるということ自体が運動の側面としてだいじなのではないか」とのべた。

4. 川瀬氏は、テキストがないために自主的な実践がすすまないということもあるので、困難なしごとではあるがいまF技術教育研究会も自主編成テキストづくりにかからなければならぬと繰返し強調し、製図についてソビエトの教科書を紹介しながら若干の意見をのべた。それは自主テキストであるからには、あちこちの教科書などから図面を借りて写し

たりするのでなく自分達で図面をひくことが必要であるし、説明文もていねいにつくらなければならない、単元ごとに課題を与えるという配慮も必要である、などである。

討論のなかでは、高橋豪一氏が西野氏と分担しながらテキスト（プリント）づくりをすすめていること、亀田氏が検定教科書批判のなかから自主編成にとりくんでいる、などの紹介も出された。

5. 討論は、校教研としての自主編成テキストづくりにとりくもうという方向ではほぼ一致していたので、具体化するための方策も議論された。そのなかで佐々木は、この席で決めてしまうのはやや性急だから今日の議論をふまえて常任委員会としても手順を検討したいとのべ、また、「われわれとしては、従来から研究されてきた成果に依拠して、既成のもののもつ欠陥をのりこえることを自覚的な

課題とし、最善のものをつくろうという意欲が望ましい。しかし、実践の多様性ということは保障しなければならない。その保障があるならばテキストの使われ方に枠をはめる必要はない」とのべた。具体的なすすめ方に関連しては、高橋氏から「専門的にとりくむ作業班が必要ではないか」という意見も出されたので、このことをふくめて常任委員会で検討し、大会の場でも検討するという方針を確認して散会した。（佐々木 享）

転勤・転居の際は

必ずご連絡下さい。

転勤・転居の際は、できるだけ早くご連絡下さい。最近、せつかくの会報が転居先不明ということで返送されてくることもあり、事務局では困惑していますので。